

# 第15回 国際結核セミナーに参加して

日時：平成22年3月4日(木)13:00～17:30

場所：東京・新橋 ヤクルトホール



国立病院機構刀根山病院  
ふじかわ たけや  
藤川 健弥

平成22年3月4日、東京・新橋のヤクルトホールにて、第15回国際結核セミナーが開催された。テーマは「結核対策の技術革新」であり、冒頭、結核予防会結核研究所の石川信克所長より、今年のスローガンが「イノベーションで結核対策を加速しよう(ON THE MOVE AGAINST TUBERCULOSIS / Innovate to accelerate action)」であることが紹介された。特別講演は、FINDのDr. Roscignoより「結核の革新的技術：現在と今後の対策への貢献」と題して行われた。FINDとは、2003年に設立された非営利基金団体である。そのスタッフは、公的機関からとプライベートな機関からがほぼ半数ずつであり、各国の保健省にあたる機関との協力関係の下に事業援助を行っている。結核については、世界的にみると、その患者発見は不十分であり、早期診断の重要性はますます高まってきている。このような状況において、2005年に新しい迅速診断法の開発について日本の企業と合意した。開発されたLAMP法は、手技としては簡便な検査法であるが、医療現場に高性能の検査を持ち込めるようにした点が、非常に重要である。今後は、多剤耐性結核患者の発見についてだけではなく、結核以外の疾病にもこれまでの技術を応用していきたいということであった。

続いて、「新技術の現在及び将来への期待」と題したシンポジウムが開かれた。まず、「耐性遺伝子診断の進歩」として、国立国際医療センター研究所の安藤弘樹先生より講演があった。耐性遺伝子診断とは、薬剤耐性に関わる遺伝子もしくは遺伝子間領域の変異情報から薬剤耐性を獲得しているかどうかを判断することであり、従来の培養法に比べ、迅速で一定の判定を得ることが可能である。RFPに対するrpoBについては、感度が100%であるが、INHに対しては、感度が64%であり、今後まだ「進歩」させることが可能である。そのため、変異情報の蓄積や新規遺伝子・新規変異の機能解析、未知耐性機序の解明などが求められるということであった。「期待される新抗結核薬」として、結核研究所の伊藤邦彦先生が、TMC207やPA-824、OPC-67683について、現在の開発状況について説明さ

れた。現時点では、臨床的有効性の見込みについて議論できる状況ではないとのことであった。次に、「新抗結核ワクチン開発の現状」として、日本ビーシージー製造の山本三郎先生より、新規結核ワクチンとして、弱毒結核菌ワクチン、リコンビナントBCGワクチン、サブユニットワクチン、DNAワクチンなどが紹介された。今後の課題として、ワクチンの安全性や有効性を確立すること、休眠結核菌に有効なワクチンを開発することを示された。「核酸増幅法検査の進歩」として、栄研化学株式会社の幸保孝先生より、特別講演の演者であるDr. Roscignoの所属するFINDと提携し、結核菌の迅速診断を可能にする、PURE・TB-LAMP法について、その原理と方法が紹介された。途上国のPeripheral Lab.において、簡便かつ短時間に診断ができる方法であり、塗抹陽性の95%、培養陽性でも60%近くの陽性率ということであった。最後に、「反復配列多型(VNTR)法による分子疫学」として、結核研究所の前田伸司先生より、その原理について、そして日本国内におけるクラスター分析法の標準化について説明があった。クラスターの形成率と解像度は反比例の関係があり、そのバランスをどうとるかについて、具体例を用いて説明された。最後に結核菌の系統地理学的分布についても解説された。

最後に、結核研究所の下内昭副所長から、技術革新が結核対策を進めていくことにつながるとまとめられた。

今回のセミナーでは、結核に対する診断や治療薬についての技術革新が着実に進んでいることを実感することができた。また、これらの技術革新に日本の企業や研究所が積極的に関わっていることにも、大変感銘を受けた。迅速な、そして確実な診断や適切な治療が重要であることは間違いないことであるが、これらの技術革新を駆使すれば、そう遠くない日に結核を撲滅できるのではないかと思ひながら、会場を後にした。